

2021年8月29日 聖霊降臨節第15主日礼拝メッセージ

「命の神につながって」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ 15章 35-52節

再び厳しい残暑が戻って来た一週間でしたが、皆様はいかがお過ごしでしたでしょうか。この一週間は、私の身近な所でも新型コロナの陽性者や濃厚接触者の話をたくさん耳にして、感染が全国に広がっていることを、肌で感じさせられた一週間でした。恐らく、このようなことはまだまだ続いていくのだろうと思います。

新型コロナウイルス感染症によって、世界中では約450万人が亡くなり、日本では約1万5000人の方が亡くなったと報じられています。この新しい病気の出現によって、世界は新しい「命の危機」に脅かされました。日本では昨年春以降、何度も「緊急事態宣言」が出されて、何だか「緊急事態宣言慣れ」になってしまいましたが、世界では今でも厳格な「ロックダウン(都市封鎖)」を行って、感染を封じ込めている国もあるそうです。世界中で緊急開発・緊急承認された「ワクチン(予防接種)」が接種されていますが、ウイルスは次々と変化し続けていて、もはや「集団免疫による感染予防は期待できない」と言われています。その一方で、日本ではオリンピックに引き続いて、パラリンピックまで開催されています。「多様性と調和」などが大会の基本テーマとされていますが、一人一人の人権を守り、命を守るということが、どこまで考えられているのでしょうか。私には、どうしても「命」が軽んじられているように思えてなりません。

さて、今回の聖書は、パウロがコリントの教会の人々に書き送った手紙の中から、「復活(死からの引き起こし)」について書かれた部分でした。コリントというのは、ギリシア本土と半島とをつなぐ地峡にある町で、現在では運河が造られているそうです。そのような狭まった場所ですので、古代から、交通や商業、また軍事の要所として栄えていた都市でした。そこには多くの人々、民族も文化も様々な人々が集まっていたので、コリントの教会は様々な問題を抱えており、パウロのところにはコリントの教会の人々からの「こんな問題があって、困っています」というような手紙が届いては、パウロもまたそれに答えて、返事を書き送るというようなことをしていたようです。丁度15章は「キリストの復活」に始まり、死者の引き起こしについて書かれていますが、それもコリントの教会の中に「死者の復活などない」(12)と言う人がいたからでした。パウロも「死者はどのように復活するのか、どのような

体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません」(35)とっています。パウロは、元々はファリサイ派のユダヤ教徒でした(フィリピ 3:5)が、同じユダヤ教の中でもファリサイ派と対立していたサドカイ派の人々は「復活などない」(マルコ 12:18)とっていたようです。ですから、死者の復活、死からの引き起こしについては、当時から様々な考えがあったのでしょう。そして、他の宗教、他の文化の人々も集まって来ていたコリントでは、なおさらでした。そのような人々に対して、パウロは自分が受けて来た福音、キリストの復活と、死者の引き起こしについての手紙を書いたのです。さて、この手紙から約 2000 年を経た今日、私たちはこの言葉から何を受け取るでしょうか。「死者の引き起こしは、確かにあるんだ」と断言することは、一体何を意味しているのでしょうか。

話は変わりますが、私は昨年から日本臨床宗教師会に入り、その研修に参加しています。臨床宗教師会というのは、10年前の東日本大震災の際、被災地に様々な宗教者が集まり、被災者と遺族の鎮魂、追悼と、スピリチュアルケアに携わったところから始まりました。そのために多様な宗教者が集まっていて、実際には仏教のお坊さんが多いのですが、普段の研修会でも、仏教、神道、天理教、金光教、キリスト教など、様々な宗教者が集まって共に研修をしています。当然それぞれに教義が異なり、死者や死後についての理解も異なっているわけですが、そこでの研修会で言われたことは、「たとえどの宗教であっても、宗教者は葬儀などを執り行う者として、死後の世界について理解を持っている人、また諸々の儀礼を通して死者と生者、死んだ人と今生きている人たちとを取り結び、つなぐことのできる特別な人として理解されている」ということでした。つまり、「実際にそれが可能かどうか」ということではなく、「そのように周りの人々から期待され、理解されている」ということでした。それを聞いて、私はとても納得できました。他の宗教や宗派については分かりませんが、プロテスタント・キリスト教は、あくまでも万人祭司ですから、按手を受けた牧師であっても、それによって他の信徒たちとは異なった特別な能力、それこそ「死者と対話をしたり、死者の霊を呼び出したりするような特別な力が自分にある」というような自覚は、私には全くありません。私に出来ることはただ、聖書にはこのように書かれていて、自分はその言葉をどのように受け取り、日々に歩んでいるか、生きようとしているか、ということをお伝えするだけです。

例えば、私がチャプレンとして、お話を聴かせて頂いている日本コイノニア福祉会の特別養護老人ホームでは、入居されている方々は、ほぼ全員がクリスチャンではありません。むしろ昔から続く地域のお寺の檀家として、先祖伝来のお墓や仏壇を守って来たという方が多くおられます。「自分が死んだら阿弥陀如来様がお浄土

へ連れて行ってくれる」と言われる方に、私は「イエス・キリストを信じなさい」とは言いません。なぜなら、この世界を創り、全ての命を創られた神、私たちと同じ肉体を持った人間として現われたイエス・キリストは、そのような他宗教の信仰をお持ちの方々の命も作られ、そして生かされているからです。

特養で毎年行われる永眠者記念礼拝では、その一年間に召された方々のお写真を並べて、お名前を挙げて記念します。当然、その中にはクリスチャンの方はいませんが、それでも私たちに出来ること、私たちがすべきことは、この地上での歩みを終えた後に、「あなたは天国行き」「あなたは地獄行き」と言ってそれぞれの方の行き先を判定することではなく、全ての人の命が、神様によって与えられ、意味のある命、価値のある命として大切にされていたこと、そしてこの後も変わらず大切にされているということをお伝えすることなのだろうと思います。それ以外のことは私には分かりません。福音書の中には、死後には天国と地獄、アブラハムの懐と陰府に行く(ルカ 16)というような、ユダヤ教伝来のたとえ話もいくつかは見られますが、イエス様自身は、死後のことは「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」(マタイ 8:22)という以上のことは言われていません。また「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」(マタイ 22:32)とも言われています。死んだ後のことを心配するよりも、まずは今の命、神様から与えられ、生かされている命に、しっかりと目を向けるようにと言われているように思います。

パウロは、今回の聖書の箇所、死者の復活、復活の体について、植物の種にたとえたり、生き物の肉にたとえたり、星の輝きにたとえたりしています。「種が死ぬことで、新しい命である実を結ぶ」というのは、『ヨハネによる福音書』(12:24)にもみられる表現ですが、現代の私たちにとっては、種が「死ぬ」という表現は何だかすぐわなない気がします。しかし、聖書の中で「死」は「眠り」と同じように語られていますし、小さな種粒が割れて、そこから全く新しい芽や茎が伸び、新しく実をつけていく様子は、固く眠りについてた種が、そこから新しい命として復活させられていく姿として、理解されていたのかもしれませんが、42 節から記されている「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します」という言葉も、一読しても何だかよく分からない表現ですが、要するに私たちのこの肉体、時間と共に年老い、怪我もすれば病気にもなる、そしてやがて必ず死んで土に還っていくこの肉体が、失われても、その命は決して終わらない、死から復活させられ、引き起こされていく、という命の永遠性、絶対性を表現したものなのではないかと思えます。イエス様は「7 人の夫を持った妻が復活の時には誰の妻として復活するのか」というサドカイ派の問いに

対して、「復活の時には、めとることも嫁ぐこともない。天の御使いのようになるのだ」(マタイ 22)と答えました。この肉体は朽ちていっても、その霊、命それ自身は、決して朽ちることなく、生前の立場や役割などという束縛を越えて、自由に生き存在する、ということでしょうか。

パウロは、この手紙の中で、さかんに「肉」や「体」という言葉を強調していますが、私たちのこの肉体が死んだ後も、そのまま復活するのか、と言うと、もちろんそんなはずはありません。もしもそうだったら、「何歳頃の身体で復活するのか」、「若い頃の元気な身体がいいな」、「でもそうしたら天国で家族や友達たちに見つけてもらえないかもしれない」……、そんな心配すらしてしまいます。しかし、ここでパウロが言っているのは、人間は霊と肉の二つからなっていて、霊や理性こそが価値のあるもので、肉体はその入れ物に過ぎないというような、当時のローマ帝国支配の世界に流布していた「霊肉二元論」という古代ギリシア哲学などへの反論だと考えられます。神様はこの肉体も創られ、そしてそこに神の霊、命の息を吹き込まれ、私たちは生かされています。霊だけが価値あるもので、肉体はそれに劣るものではありません。私たちの命は霊も肉も両方があってこそそのものです。ですから、ここでパウロが「自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します」(44)と言っているのは、肉体を離れて霊だけが復活するのではなく、他でもないあなた自身、私たち自身の命が確かに復活させられるのだ、ということを述べているのだと理解することができます。

そして最後 51 節では、パウロは「ここで、あなたがたに秘儀、神秘を告げましょう」と切り出します。「私たち皆が眠りに就くわけではありません」「私たちは皆、一瞬のうちに、死者は朽ちない者に復活し、私たちは変えられます」……。このやがて朽ちていく肉体の命は、それで終わりではない。死者は朽ちないものとして引き起こされ、命の神から与えられた絶対の命を生きていく。そのことが述べられているのだと思います。

私たちは誰一人として自分で生まれて来た人はいません。命は自分の力ではなく、外から与えられるものです。命の神によって与えられた一つ一つの絶対なる命……。今、世界は新型コロナウイルスという新しい病気のために、そしてまた人々の命を守ろうしない国の政策のために、多くの命が脅かされています。オリンピック・パラリンピックの報道も、コロナの感染から人々の目を逸らせるための、一時的な麻薬のようにも思えます。多くの命が顧みられず、大切にされないこの時代にあって、命の神によって今日も生かされている私たちは、命の神につながって、自分たちの都合に従うのではなく、神様の御心に従って歩めるように、今日もイエス・キリストの後に従って歩めるようにと、その道へと押し出されて行きます。